

## 地域の先人を題材とした教材を活用し、道徳性を育成する道徳科指導のあり方 ～新しい佐倉学道徳の再構築を目指して～

小林 浩之

### 第1章 問題提起と研究目的

佐倉学道徳の授業を通して解決が求められる道徳教育の現在の問題点は7点である。

まず、社会的背景から求められるのは、①人と人とのつながりや地域のよさを知ること、②人のために活動すること、③自己の生き方について考えることである。

つぎに、道徳教育の目指す姿から必要とされるのは、④よりよく生きるための道徳性を養うこと、⑤個人と集団のウェルビーイングを高めることである。

さらに、佐倉学道徳の現状から解決しなくてはならないのは、⑥佐倉学道徳教材の活用が図られること、⑦「考え・議論する」道徳科に合致することである。

本研究ではこれらの問題を解決し、「地域の先人を題材とした道徳教材を活用した道徳科の授業・道徳教育を行い、児童が自己の生き方について考えを深め、幸福感を育成すること」を目的に、地域の先人を題材とした道徳教材と効果的な指導法に焦点をあてていく。

### 第2章 地域の人物を題材とした教材をとりあげる根拠と道徳的位置付け

文部科学省、千葉県、ロールモデル、ウェルビーイングの4観点からの分析により、地域の先人を題材とした教材を活用した指導の道徳的位置づけを「道徳性」「人物教材」「地域教材」の3つの側面から、次の様にとらえる。

#### 1 道徳性の側面

小学校学習指導要領に定められる道徳教育、道徳科の目標に照らし、地域の先人の生き方を学び、これまでの自分の経験や感じ方、考え方と照らし合わせながら改めて自己を見つめ、考えを深めていくことが、自己の生き方についての考えを深め、よりよく生きるための基盤となる道徳性を育成するために必要であると考えられる。

#### 2 人物教材の側面

道徳科の学習の教材のために設定された架空の人物の生き方ではなく、地域に実在した先人の生き方を知り、共感し、自らのロールモデルとして考えられるようになることは、「内容項目22 よりよく生きる喜び」、つまり幸福感を理解することにつながる。

児童は、自分自身を人間としてより高めたいという思いをもち、日々努力している。人間として生きる喜びは、努力が成功につながったことだけから得られるものではない。努力しても必ず困難に当たり、挫折を感じ、自分の弱さに気付き、さらに挫折につながる。

そういう時、先人の生き方を学ぶことで、人間であれば誰しも弱さをもっていること、困難にあたること、その時は、強い気持ちでそれを乗り越えていることに気付く。その可能性は誰しもにあり、ロールモデルとした目指す生き方に目を向けていけるようになる。

人は道徳的価値に共感するのではなく、人の生き方に共感するのである。

### 3 地域教材の側面

自らのロールモデルとする先人、自分の共感した先人が自分の生まれ育った郷土の人物であることを事実として理解する。このことにより、郷土の伝統と文化を大切にしようとする気持ちが大きく育つ。そして、郷土を誇りに思う気持ちにつながっていくと考える。

また、先人の業績や努力が郷土の今につながっていること、今の生活が先人の働きの上に成立していることを知ることは、自らも郷土の伝統と文化を将来につなげていこうとする態度につながり、自分も郷土のためにできることに、取り組もうと考える。

## 第3章 現状（問題点と改善の方向性）

### I 人物教材（偉人伝や伝記）に対する否定的な意見について

先行研究を踏まえ、人物教材に対する従来の意見に対する対応は次のようになる。

第一に、人物の業績にのみ、目を向けさせるのではなく、人物の生き方に目を向けさせることである。児童が、その人物と同じ業績をあげることができないことは、誰しもが分かることだが、その「生き方を貫く考え方」は学ぶことが可能である。

第二に、偉人といえども、同じ人間であり、時代が違っても、人間としての共通点があることに気付かせることが、教師の役割である。歴史的な時代背景や社会情勢については、「エピソードファイル」を発達段階に応じて作成し、事前学習が解決可能である。また、過去が如何に「今につながっているか」を示し、更に未来につなげるべく「学びを如何に実践に結び付けるか」も重要な観点である。偉人の人生を児童の世界の中で、一人の人間同士として再構築させ、偉人が児童にとって「ロールモデル」となるよう指導する必要がある。

### II 現在の検定教科書の分析と考察

#### 1 検定教科書に人物教材を採用する一般的留意点

- ① 該当の人物の評価が定まっていること。（人権的・思想的問題がないこと）
- ② 特定の思想、宗教、政治、企業などと密接に関連していないこと。
- ③ 人物の業績やエピソードが内容項目に合致し、子供たちが理解し、学ぶに値し、共感し得るものであるか。（光村）
- ④ 性別、職業、出身地に偏りがないようにすること。（日文）

⑤ 授業一時間で扱える文字数にエピソードや時代背景がまとめられること。(日文)

## 2 出版社・学年別

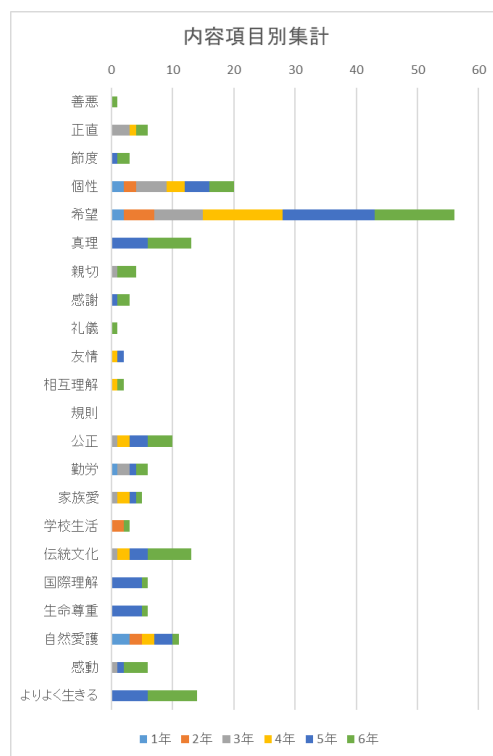
集計結果を出版社別にみると、人物教材の採用数には11～40教材と大きな開きがある。先人の業績を教材にしたものは現場の先生からは敬遠される傾向がある。その理由として、先人の業績は「偉業」であるため、その人物をめぐる出来事について、児童が自分事として考えることができないため、その人物に対する知識的な学びだけになってしまう。どこか別の世界の人、自分とはかけ離れた人だという反応になり、授業がしづらいという現場からの声があるからということである。

そして、これらの声に対する策として、できるだけ児童の関心をえられるような人物を選ぶようにしたり、全国的には有名ではないが、ある地域では有名であったり、児童にとって身近なことで業績をあげていたり、幼少期のエピソードを取りあげたり等、出版社毎に様々な工夫が施されている。

学年別にみると、どの出版社も高学年になるに従って、人物を取りあげる割合は増えている。これは、児童の発達段階を意識しての結果である。人物を扱う以上、その人物の業績が低学年の児童が授業時間一単位時間の中で学ぶことができる教材にまとめることができるという条件が加わる。先人には、時代背景の「前知識」が必要になる人物も多く、高学年で扱う場合が多くなっている。

## 3 内容項目別の集計

人物教材で扱われる内容項目としては、「A 主として自分自身に関すること」の「5 希望と勇気、努力と強い意志」及び「4 個性の尊重」が多いことが分かる。これは、教材で取り上げられるエピソードがある人物が成し遂げたこと・成し遂げようとしたことと関係するものである以上、この2つの内容項目に結びついてしまうのは、自然であるように考えられる。また、教材化の手順として、内容項目ありきで人物を選んでおらず、結果として内容項目が後からついてくる形になっていることも、理由の一つであると出版社の担当者は述べている。



4 教材で扱う人物の、先人（既故者）か現存者で分類は次のようになる。

|      | 1年  | 2年  | 3年  | 4年  | 5年  | 6年  | 合計  |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 現存者  | 2   | 7   | 10  | 14  | 24  | 26  | 83  |
| 先人   | 6   | 4   | 13  | 13  | 32  | 40  | 108 |
| 合計   | 8   | 11  | 23  | 27  | 56  | 66  | 191 |
| 現存者率 | 25% | 64% | 43% | 52% | 43% | 39% | 43% |

現存者が人物教材で扱う人物の43%に達し、2学年では64%と高い

率を示している。存命中の人物については、「今後、当該の人物の評価がどうなるか定かではない」というリスクがありながらも、存命中の人物を扱うのは、児童にとって自分と同じ「今」を生きている人物のほうが、身近に感じられること、児童が知っていて親しみを感じられる人物であることが理由として挙げられる。

しかしながら、扱われている人物にはスポーツ選手等の現代的な有名人が多い。確かにオリンピックなどの代表に選ばれたスポーツ選手は、運動の選手としては優れているであろうが、道徳的な価値という点ではどれほど高く評価されるのか。道徳的に評価されるべきは、「安心・平和・幸福」等の面で人々のために尽くした人、社会に貢献できた人である。児童にとっての親しみのみを重視し、教材にすることには、疑問を感じる。

学習前にはあまり親しみがない先人であっても、その生き方の素晴らしさに目を向けさせ、児童自身の人生の中でどういう意味を持つものか教え、自分の世界の中に先人の価値を再構築させていくのが、教師の役割であり、真の道徳科の授業ではないかと考える。

### Ⅲ 全国の都道府県及び千葉県内における地域の先人を題材とした道徳教材の現状

#### 1 全国の都道府県（千葉県外）における活用例

全国の19道府県で作成された郷土教材を分析すると、次のようなことがわかる。

郷土教材集を作成していても、さいたま市や京都府、大阪府のように、人物教材を一つも取り入れていない場合がある。仮に人物教材を扱っていても、1～2教材しかないことである。しかも、多くは発達段階を考慮して、小学校高学年や中学校で採用されている。このような動きに対し、北海道や岩手、宮城等では、先人に焦点をあて、道徳の教材集を編集している。これらの道県では、「先人の生き方」を通し「自らの生き方を見つめる」ことを明確な方針としているという共通点があり、この視点に関しては、佐倉市においても大いに参考にすべきであると考えられる。

#### 2 佐倉市以外の千葉県内における活用例

千葉県内で地域の先人を道徳教材として活用している例として確認できたのは、千葉市のみであった。他の市町において、数多くの先人が存在するが、社会科等の資料の一環として教材化された例はあるが、道徳（科）としての教材化の難しさを挙げる市町が多いの

が現状である。

#### IV 佐倉学道徳の実施状況調査結果と分析

##### 1 佐倉学道徳の現状

佐倉市では、平成19年度から佐倉学の道徳教材の検討作業を開始し、平成23年度末に先人を題材にした小学校教材を6編作成した。その後、教材の編集委員会を毎年開催し、二次・三次と新たな教材を開発し、現在は小学校で教材は15編となっている。

##### 2 佐倉学道徳の実施状況調査

1)全教材の実施率は43%であ

り、高いとはいえない。

2)教材毎にみると、当初作成され

た人物6教材は、他の教材と比較し、実施率が高い。

3)学校毎の実施率は0～93%と学

校間の差が大きい。各学校の事

情や佐倉学に対する姿勢が大きく影響していると考えられる。また、佐倉市は「佐倉地区」「臼井地区」「和田・弥富地区」「志津地区」の4地区で構成されている。人物教材をはじめとして、多くの教材がかつて佐倉城があった「佐倉地区」に関わる内容である。そのため、「佐倉地区」以外の3地区では、佐倉学道徳への関心が薄い傾向が読み取れる。

4)実施が難しい理由を調査結果からまとめると次の5点になる。

①道徳科になり、新しい教科書、新しい道徳科として授業で手が一杯である。

②佐倉学道徳の教材が多く、年間計画にも位置付いてなく、教材の選択ができない。

③教師・児童双方にとって、先人になじみが薄く、教材や内容が難しそうで歴史的背景等の理解が困難である。

④教材文や展開案が新しい道徳科への改訂を十分踏まえていない。

|    | 学年 | 教材名           | 内容項目       |
|----|----|---------------|------------|
| 1  | 低  | 津田梅子          | 努力と強い意志    |
| 2  | 中  | 堀田正倫          | 国や郷土を愛する態度 |
| 3  | 中  | 佐藤泰然          | 公共の精神      |
| 4  | 高  | 西村茂樹          | 希望と勇気      |
| 5  | 高  | 津田 仙          | 真理の探究      |
| 6  | 高  | 浅井 忠          | 努力と強い意志    |
| 7  | 低  | おしえて、カムロちゃん   | 国や郷土を愛する態度 |
| 8  | 低  | 先崎のケヤキ        | 国や郷土を愛する態度 |
| 9  | 低  | わたしの町さくら      | 国や郷土を愛する態度 |
| 10 | 中  | 香川松石          | 個性の伸長      |
| 11 | 中  | 佐倉こどもカルタ      | 国や郷土を愛する態度 |
| 12 | 中高 | 倉次 享          | 集団生活の充実    |
| 13 | 高  | 佐倉の魅力を伝えたい    | 国や郷土を愛する態度 |
| 14 | 高  | 新しい農業への挑戦     | 希望と勇気      |
| 15 | 高  | おじいちゃんのフェーリップ | 伝統と文化の尊重   |

⑤教材そのものの周知が十分でなく、掲示資料やワークシートなどが不十分である。

## V 佐倉学道徳の改善の方向性

以上の調査結果の分析から、改善の方向性と可能な対応策を探ると次の通りとなる。

新しい教科書、道徳科への対応で手が一杯であるという意見に対しては、佐倉学道徳を加えた道徳科年間指導計画の例示を行う。佐倉市で現在採択されている出版社の教科書には30時間分の教材が提示されている。佐倉学に加え、千葉県では県作成の映像教材の活用も求められている。すると、各学年2～3時間が佐倉学道徳が実施可能な時数である。

教材の精選を行い、市内の地域性（市内どの地区に関係あるか）を考え、学年ごとに教材を配置し、学校の独自性にも対応できる余地を残した年間指導計画を考案していく。

教材や学習内容が難しそうで馴染みが薄く、歴史的事実や背景等の理解が困難であるという課題に対しては、教材をねらいとする価値に結び付く内容にしぼり、教材文をできるだけ短く、分かりやすくまとめること、歴史的事実や背景及び先人の人生に関わる逸話を簡潔にまとめたワークシートを複数枚作成し、事前学習で予備知識として学ぶようにしておく。児童と同時に、教師もその教材研究の過程で先人について学ぶことが可能になる。

また、指導要領改訂以前に作成された教材及び指導案については、新学習指導要領の趣旨を加味し、一部または全面的に修正していくことが必要である。特に、ねらいとする内容項目を授業のはじめに児童に示し、授業の焦点化を図った後、「テーマ発問」を行い、「考え、議論する」展開に改訂することが求められている。

佐倉市内の小学校を対象にした調査で明らかになった5つの問題点については、これまでに述べてきた具体的方策により解決が可能である。

しかし、今回の市内の小学校を対象にした実施状況調査結果からは浮かび上がっていないが、改善の必要性が高い重要な問題点は、15編の教材の系統性、関連性である。現状の15編の教材は、どれも佐倉の先人や文化、自然、行事、産業を題材にし、それぞれが道徳科の授業として、それぞれに内容項目をねらいとして、指導案が組み立てられている。しかし、学年の系統性や教材間の関連性はほとんど考えられていないのが現状である。佐倉学道徳全体として目指すゴールが明確でないために、教師が授業がやりにくい、児童にとっても分かりにくいというのが、自分自身が授業をしての実感である。

そこで、佐倉学道徳の目指す児童像～佐倉の子供たちに身につけさせたい道徳性～を明確にし、それぞれの教材の佐倉学道徳全体の中での位置付けを行い、教材間の関連性と系統性をもたせていくことが、佐倉学道徳の再構築に特に重要であると考えられる。

### 第4章 あるべき姿（問題点を踏まえて）

#### I 新しい道徳科の授業の展開

##### 1 考え、議論する価値のあるテーマ

道徳科の授業において、有意義な話し合いが行われるためのテーマの第一条件は、学ぶ価値について、授業後に児童の理解が深まり、児童なりの気付きがあることである。この授業での新しい発見や気付きが、深い学びにつながる重要な要素となる。教師は、教材分析と学習指導要領の内容項目と児童の実態から、学ぶ価値を設定することが必要である。

よいテーマが設定できる第二の条件は、導入で児童の既成概念を打ち破ることである。

驚きと気付きを出発点とすることで、問題意識が生まれ、主体的に考えようという姿勢になる。ここから、いわゆる「テーマ発問」に結び付け、問題意識を持続させ、対話的で多面的多角的な話し合いへと結び付けていくことになる。

##### 2 教材から離れ、自分事として考える場の創造

授業の前段で、教材から主体的対話的な学習過程を経た後、教材から一旦離れ、学んだ価値を自分事として考える場が必要になる。ここが、「自我関与」と言われる場面である。自我関与は、教材に関する話し合いの中でも行われることもあるが、重要なのは、教材から「テーマ発問」に対する共通解を導いた後、自分が共通解に対して、どう考えるかを自問させる場面である。授業の最後に、「授業を行った感想を書きましょう」と指示して終える場面を見ることがあるが、これでは深い学びには結びつかない。学んだことに対し、「自分はどう考えるか」「自分に何ができるか」「今後の自分にどう生かせるか」を考え、「納得解」を各自が導き出すことが、授業後の実践に結び付けるために重要になる。

#### II 地域の先人を題材とした教材のあり方

##### 1 ロールモデルとなること

児童にとって、生き方について考えを深めるために、「ロールモデル」が示されることが重要であること、先人の生き方が児童の「ロールモデル」となる可能性については、三つの観点から考察できる。学習指導要領が求める「自己の生き方について考えを深める学習を通して、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」観点からは将来の目標を具体的な姿として「見える化」すること、キャリア教育の観点からは大人になったときのゴールとなること、人格教育の観点からは身近な模範となることである。

##### 2 今につながること

先人の生き方が、単なる「歴史上の出来事」「過去の立派な人の偉業」の段階で終わるこ

となく、現在でも学ぶ価値があること、話し合う価値のあるテーマにするためには、この先人の生き方が今という瞬間、現代という時代につながっていることを示すことが重要である。日頃から、自分達が当たり前と思っているものに思いを巡らし、そこに先人の努力があることに気付くこと、感謝の心をもつことこそ、道徳的な活動と言える。

### 3 実践化につながること

道徳科の授業及び道徳教育においては、道徳性の構成諸様相である道徳的実践意欲と態度を養うことと共に道徳的実践につなげていくことが求められている。

そもそも、教育で学んだことに普遍性があること、つまり学習内容（過去に究明された事実）が現在とつながっていること（現在も真理である）、学びから得たものを実生活で役立てようとする（役立つ）こと、実生活で実現可能であることは、道徳科の学習に限らずどの教科の学習においても重要である。

これまでも、道徳性の発達には、認知・感情・行動の三側面から捉えられ、認知がいかに関行動につながっていくかが研究されており、認知したことを行動につなげていくことは道徳性の発達のために重要な要素とされてきた。（坂越 2003）

また、人の能力開発の70%以上は実際の経験によるもので、教室でなされる知識伝達型の学習が能力開発に関わる部分は僅かにすぎないと言われている。経験学習理論を唱えたコルブ(D. A. Kolb)による理論を道徳性の発達に適用して考えると、授業で得た道徳的価値はその後の「試行」によって、実践化され、行動に移すことが道徳性を高めるために重要となる。自分でイメージしたことをこれまでの具体的経験に基き、実践する。新たな「経験」が上手くいかない場合は、どうすれば改善できるのか等、改めて「省察」すべきであろう。このサイクルを繰り返すことによって、道徳性が高まっていくと考える。

特に、地域の先人を題材とした道徳科の学習においては、先人の生き方（過去）をロールモデルとし、先人の業績や生き方が今（現在）につながっていることを知り、更に実践にうつしていくことが、先人の素晴らしさを再認識することや、先人の生き方を未来に伝えていくことにもつながることになる。

以上のことから、認知的な道徳理解を実践化につなげることは先人を題材とした教材を活用して行う道徳科学習の重要な柱の一つであると考えられる。

## III 佐倉の特殊性を踏まえた再構築の方向性

### 1 佐倉の特殊性

「佐倉学」を通して育てたい「佐倉で育てたい子供像」は、次の2つの人間像である。



①「積極進取」…学ぶことの大切さを知り、新しいことを恐れず、積極的に挑戦する子

②「成徳作用」…思いやりの心を持ち、進んで世のため人のために貢献しようとする子

この二つの視点から、堀田正睦の教育観を後世に伝えるという目的意識を明確にもって、指導していくことが「佐倉学道徳」がもつ地域性＝特殊性の効果的な反映につながる。

## 2 ロールモデルになるために

以上の特殊性を踏まえ、佐倉学道徳のねらいを次の通り定める。

佐倉の先人の生き方について考える活動を通じ、「積極進取」「成徳作用」を中心とした道徳的な価値の理解を基に、自己の生き方について考えを深め、よりよく生きる道徳性を養う。

佐倉の特殊性を最大限生かし、堀田正睦の教育理念である「積極進取」「成徳作用」の2つの価値を佐倉学道徳の柱とする。そして、正睦の理念を学び、継承した佐倉の先人を中心に各学年の児童の発達段階を考慮して、各学年の教材を構成する。

授業では、先人の業績を通じて、先人の生き方に焦点をあてる。「積極進取」「成徳作用」が各先人の生き方を支える根底にあることに気付かせながら、個々の生き方を貫く考えを授業の内容項目とし、道徳的諸価値を理解させていく。その過程を通して、児童は先人の生き方に共感し、すごい生き方だと感じ、先人を自らのロールモデルとしてとらえ、その生き方を通し、自己を見つめ、自己の生き方についての考えを深め、自己の生き方に取り入れていこうとするようになっていく。

## 3 今につなげていくために

佐倉の先人の生き方を児童がロールモデルとして機能するためには、先人の生き方や思いが、「今」につながっていることを児童が理解することが重要である。

そのために、「今」につながる実例やエピソードを授業の終末で紹介したり、「今」につながる実例やエピソードを活用した道徳科の授業を実施したりすることが考えられる。

現在、佐倉学道徳の小学校教材として編集されている15編の中で、人物以外を題材にしたものが7編ある。これらの内容を分析してみると、いずれも佐倉の先人の生き方や思いが「今」につながっていることを題材としている。

どの教材も、「積極進取」「成徳作用」の精神が「今」につながっている題材を教材化したものである。これらの教材を使った授業を「佐倉の今」と題して、先人の生き方や思いが「今」につながっていることを児童に伝えることを明確なねらいとして、佐倉学道徳の教材の全体構成の中で再構築し、位置づけていくこととする。

4 実践化につなげるために

現在の道徳科の授業の枠の中での児童が学んだ価値を実践活動に移すことは難しい。従って、現状では、広く道徳教育という枠組みの中で、学んだ価値の実践化の実現を目指す。

そこで、ここでは実践化のために2つの方法を提案する。

第一の方法は、道徳科と特別活動や生活科、総合的な学習との連携である。道徳科の授業で、先人の思いや生き方をロールモデルとして、自分も学んだことを具体的に実践したいという実践意欲と態度が育成される。その後、意図的・計画的に特別活動の学級活動や生活科、総合的な学習の中で、具体的な実践活動を実施するというものである。この方法を活用すれば、比較的容易に道徳的価値を実践活動につなげることができると思う。

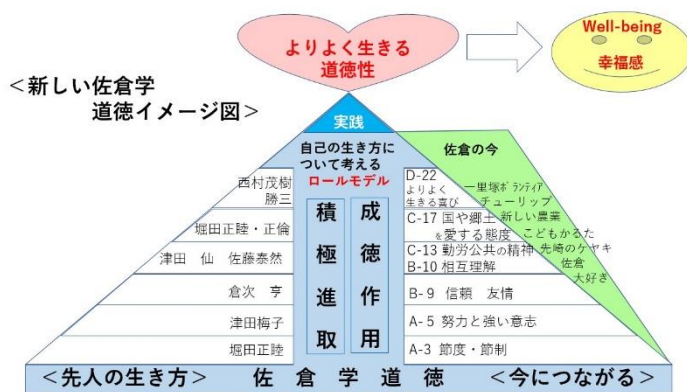
第二の方法は、総合単元的な道徳学習の計画である。

- ①学年毎に道徳教育の重点目標を設定し、学年テーマとする。(学年の系統性を考慮)
- ②学年テーマに沿って、テーマ達成の意識の流れを考える。
- ③関連する内容項目の道徳科授業を選択(地域の先人を題材とした授業が核)配置する。
- ④他の教科・領域及び学校行事との関連を図る。
- ⑤核となる道徳科の授業の後、特別活動の授業で道徳科の学びを「宣言」にまとめる。
- ⑥「宣言 私たちは〇〇を目指します(例)」に沿った実践活動を総合的な学習等で行う。
- ⑦実践活動を振り返り、思いを他の学年や家庭・地域に発信し、次の活動につなげる。

これらの一連の活動を通じ、各自がよりよく生きるための道徳性の育成につながり、さらには幸福感を実現できると考えるのが、新しい佐倉学道徳のあるべき姿である。

第5章 具体的改善案(略)

西村茂樹を題材にした教材化例



第6章 結論

「地域の先人を題材とした教材を活用し、道徳性を育成する道徳科指導を行う」ために必要な諸条件として、次の3点を挙げることができる。すなわち、①児童にとって、先人の生き方に共感し、ロールモデルになりうること、②先人の生き方(業績)が「今」につながっていることが分かること、③先人から学んだ生き方を自分のものとして、実践化で

きること、である。

先ず、先人は、実在した人物であるからこそ、その生き方に共感できる存在になり得る。もちろん、先人の生き方は、児童にとってはある意味「憧れの少し遠い存在」であるかもしれないが、それだからこそ、高い目標になり得るわけである。問題は先人と児童の関係性のギャップにあるのではなく、そのギャップをいかに埋めるかという教育方法にある。

児童が、少し遠い存在と感じる先人が自分たちの生活する地域に存在していたことを知れば、先人の生き方や業績が「今」に通じていることに児童が気付くきっかけを得ることができる。さらにそのきっかけをうまく活用して児童の興味を刺激するような授業展開を考えれば、地域の先人は児童にとってより身近で親しみやすい存在になるとともに、児童は地域に生まれ生活することに誇りを感じ、自らの郷土（生まれ育った地域）に対する愛着も感じるようになるだろう。

道徳科の学習において、先人の生き方についてみんなで考え、議論する活動が効果的に展開できれば、児童一人一人が自己を見つめ、自己の生き方について考えを深める学習につながり、よりよく生きるための基盤となる道徳性も養われることになる。

児童一人一人が自己の生き方について考えを深め、よりよく生きるための基盤となる道徳性が養われることは、グローバルな教育目標、例えば、OECDが「OECD Education 2030 プロジェクトについての報告書」（文部科学省 日本語仮訳 2018）の中でいうところの自らが「進んでいくべき方向性を設定する力」の向上にもつながるものである。さらに実践する力が加わることにより「目標を達成するために求められた行動を特定する力」も向上し、児童のウェルビーイング（幸福感）の増進にも役立つことだろう。

以上のような視点から「佐倉学道徳」の再構築を考えると、佐倉の子供たちが「よりよく生きる」ために、道徳的な価値を身に付けさせる上で、先人の教材を用いることはより高い教育効果を期待できるように思われる。たとえば、「堀田正睦」を例にとると、この偉人を輩出した地域の先人たちが受け継いでいる「積極進取」や「成徳作用」という道徳的価値に対する理解を深めれば、今以上に道徳科の学びの柱が明確になるであろう。さらにこの理念が、「今」に生きていることを示す事例やエピソードの紹介を通して、教材の位置づけと授業の中でねらいを明確にし、それらを分かりやすく児童に提示すれば、現在すでに使用されている佐倉学道徳の教材と並行させながら有効活用が可能である。その際、佐倉学道徳の再構築の鍵となるのは、「先人の生き方」と「今に生きる理念」を計画的に連携させることであろう。

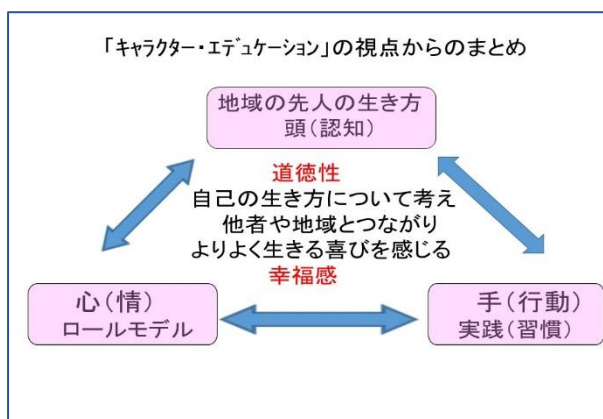
本研究は、道徳科の授業において「先人を題材として教材に生かす」ことで期待できる教育効果を論じたが、このような視点は、日本全国さらには世界のどこでも実施できるという意味で、グローバルな意義をもつのではないかと考える。また、特定の「地域の特殊性を生かす」という点では、特定の地域に限定されたローカルな教育の必要性も重視しているのである。この地域性については、佐倉に「積極進取」と「成徳作用」という道徳的な価値を見出せるように、日本全国どこの地域においても地域に根付いた文化が存在し、そこに「地域の特殊性」を見出すことは可能である。

現代はえてしてグローバルな視点のみが強調されやすい傾向があるが、本来の道徳教育としては、グローバルな面とローカルな面の両者を併せもつものが、自己、そして、自己の属する地域共同体のアイデンティティへの理解を深めるためにも必要である。「グローバルな教育」とでも呼ぶべき、新しい教育モデルとしての重要性を指摘しておきたい。

さらにまた、この地域の先人を題材とした道徳科の指導は、アメリカの人格教育（キャラクター・エデュケーション）の考えと一致する面が多い。

欧米の人格教育（キャラクター・エデュケーション）においては、頭（認知）・心（情）・手（行動）の三者が相互に関連し合って、人格を高めていくという教育プロセスを重視する。（リコーナ 2001）この教育方法を地域の先人を題材とした道徳科指導と関連づけると次のようになるだろう。

頭（認知）は地域の先人の生き方を知り、道徳的価値を理解すること、心（情）は先人の生き方に共感し、ロールモデルとして情緒的に理解すること、手（行動）は先人の生き方を学び、自分に取り入れて、実践化することである。



このように、道徳性を養うプロセスの中で、児童は自己の生き方について考え、他者や地域との絆を理解し、よりよく生きる喜びを感じ、それが各個人の幸福感向上へとつながっていくのである（左図 参照）。地域の先人を題材とした教材を活用した道徳科の授業が、人格教育と多くの共通点を持つ

ということ、グローバルな時代の道徳教育としても汎用性が認められると言えるのではないかと。

## 修士論文要旨

### \*参考・引用文献

- 加藤宜行(2017)『考え、議論する道德に変える 指導の鉄則50』明治図書
- 木原一彰 (2013)「先人の生き方に学ぶ道德時間の創造～エピソードファイルを活用した授業実践～」 『道德と特別活動』 明治図書 6月号 59-63頁
- 経済協力開発機構 (OECD) (2018)『教育とスキルの未来 OECD Education 2030 プロジェクトについて』(日本語仮訳 文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室)  
[www.oecd.org/education/2030/OECD-Education-2030-Position](http://www.oecd.org/education/2030/OECD-Education-2030-Position). (2020. 11. 21)
- 坂本雅明 (2008)「経験から学ぶ一経験を中心とした学習モデル」 パーソルランニング株式会社 [https://li.persol-group.co.jp/co\\_creation/column/consider/9055.html](https://li.persol-group.co.jp/co_creation/column/consider/9055.html)  
(2020. 10. 14)
- 佐倉市教育委員会 (2011)「西村茂樹」『佐倉学道德副読本 佐倉の道德【小学校版】』
- 佐倉市教育委員会 (2010)『佐倉学 ～好学進取の気風と品格ある佐倉人の育成～』
- 高柳充利 北田愛治 (2015)「読み直される偉人伝と道德教育—布田保之助を扱った小学校4年生の事例から出発して—」 『信州大学教育学部研究論集』 第8号 97-107頁
- 千葉県教育委員会(2018)『道德教育の手引き』千葉県教育委員会
- 藤田善正 (2015)「伝記による道德教育—歴史的変遷と教材化への視点—」 『大阪総合保育大学紀要』第9号 67-82頁
- 宮古市教育委員会 (2013)「岩手県教育研究発表会発表資料」『道德時間の充実を図るための「魅力的な地域教材の開発」～地域教材の資料化の試み～』
- 文部科学省(2014)「道德に係る教育課程の改善等について 改善に向けての主な論点(案)資料3 道德教育の教材・教科書について」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/049/siryo/\\_icsFiles/afieldfile/2014/07/02/1348984\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/049/siryo/_icsFiles/afieldfile/2014/07/02/1348984_1_1.pdf) (2020. 11. 21)
- 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 特別の教科 道德編』
- Marvin W. Berkowitz (2012) .*You Can't Teach Through a Rot and Other Epiphanies for Educators*, Character Development Group, Inc, (中山 理監訳 (2014)『学校が変わるスーパーテクニク—アメリカの人格教育からのアプローチ』、麗澤大学出版会)
- Thomas Lickona(2001)(水野修次郎監訳 (2001)『人格の教育—新しい徳の教え方学び方—』、北樹出版)